

Title	両眼間転移における使用眼の機能の実験的研究： 弁別刺激としての使用眼条件と鏡像逆転効果
Sub Title	
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1980
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.20 (1980. )
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000020-0104">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000020-0104</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

将来とを解明するために、生活システム論の導入が必要であったのと同様の事情を含むことを、素直に認めるべきであろう。また第2のアメリカにおける行動科学的システム論の紹介にしても、大戦前のヨーロッパにおける心理学的・生態学的研究や、戦後昭和20年代の日本における生活構造論の成果が批判、摂取されるべきであったかもしれない。第3～第5の貢献は、今後更に範囲を拡大し、かつ分析を精密化することが期待されるものであろう。

#### 4. 判定

本論文は、行動科学とシステム論との広汎な領域における諸文献を克明に渉猟し、社会体系とパーソナリティ体系との中間に生活システムという研究レベルを設定して、ライフスタイルの類型とその変動に関する実証的研究をおこなうとともに、さらに包括的、統一的理論の展開への道を前進させたものとして高く評価される。社会学博士の学位を授与するに値するものと判定する。

#### 文学博士

第553号 渡辺 茂 昭和54年3月31日

慶應義塾大学大学院社会学研究科

(昭和23年1月19日生)

両眼間転移における使用眼の機能の  
実験的研究  
——弁別刺激としての使用眼条件と  
鏡像逆転効果——

#### 〔論文審査担当者〕

主査 小川 隆

(慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員  
文学博士)

副査 印東 太郎

(慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員  
文学博士)

副査 佐藤 方哉

(慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員  
文学博士)

#### 〔論文審査の要旨〕

両眼間転移の研究は大脳両半球の生理心理学的機構を解明する上に重要な指標を考えるものとされている。この解明にとって視神経完全交叉という解剖学的特徴をもつ伝書バトを用いることは極めて有効であるが、本論文は伝書バトを被験体としてこれを日指した実験的研究の

成果である。

論文は一般序論、I部、II部分れているが、著者は序論で各種の動物について行われた従来の研究を概観し、両眼・両半球間伝達経路の構造上の側面に加えて機能的側面を重視し、外的刺激布置が同じであっても、右眼又は左眼のみでこれを受容する際に使用眼の差によって異なる刺激条件が形成されることを想定した。この想定は再求心性興奮(reafference)の行動生理学的模型を前提としたものであるが、この想定に基く実験計画が述べられている。

I部では上述の実験計画に基き、使用眼の制御が弁別刺激として機能し得るか否かの検討がなされる。

実験は、1. 左眼訓練時と右眼訓練時とで正負刺激が逆転する場合、2. 左眼訓練時と両眼訓練時とで正負刺激が逆転する場合、3. 左右各単眼訓練時と両眼訓練時とで正負刺激が逆転する場合、4. 両眼では同一次元内弁別、左眼では両眼での正刺激が負刺激となる異次元間弁別、右眼では両眼での負刺激が正刺激となる異次元間弁別の場合について行われたが、また実験を通じて正負刺激以外に使用眼条件に対応する別の刺激を附加する訓練を行った。その結果、被験体は1-4の課題を学習することが可能であり、使用眼を条件刺激とした弁別がなされるといふ想定に肯定的な結果が得られた。尚、使用眼が弁別刺激として機能するのに外部附加刺激の種類と弁別課題の種類が効果をもつこともみられた。さらに著者は参考実験として定間隔強化スケジュールの両眼間転移の実験を報告し、使用眼が変わると強化後休止期間が消失するという事実を示してこの想定を傍証としている。

II部では両眼間転移の顕著な事実として近來の研究課題となっている鏡像逆転効果がとり上げられ、種々な角度からの現象の分析がなされている。先づ従来の鏡像逆転効果に関する解剖学的知見と刺激条件に関する実験的研究を概観した後、1. 負刺激を鏡像刺激に限定しないで種々に選んだ場合、2. 抑制性次元統制に鏡像刺激を置いた場合、3. 鏡像刺激に含まれる3種の対称性、即ち、垂直線対称、水平線対称、原点対称を分離した場合、4. 左右各単眼で同一の鏡像弁別を訓練した場合と左右各単眼で正負刺激を逆転した弁別を行った場合、5. 単眼弁別訓練を種々な習得基準で中止した場合について実験的分析がなされた。その結果は、鏡像逆転効果が1) 正、負刺激が必しも鏡像関係になくとも生じる。2) 抑制性の現象としても生じる。3) 3種の対称性の中、垂直線対称(左右対称)に限って成立する。4. 単眼弁別訓練後の非訓練眼による同一弁別課題に対して障害、逆転弁別課題

に対して促進の効果を示したが、一般的には単眼弁別原  
訓練の習得水準に依存してこれらの効果が現われる。

5) 左右各眼で同一の鏡像弁別を併行して訓練した場合、  
多くの日数を要したが、結局は習得され、従って効果の  
矯正が可能であるなどの点が明にされた。

著者はこれらの結果を解釈する上に伝達経路の解剖学  
的構造に加えてI部で想定された使用眼が弁別刺激とな  
るという機能的側面の仮説に基いた見解を述べている。  
即ち、使用眼に受容される刺激は被験体の正中線に対し  
て外側或は内側として捉えられ使用眼が変わることでこれ  
が逆転し、通常の状態ではこれを補正し得ない結果、鏡  
像逆転効果を生じる。しかし特定条件下の訓練によって  
補正されることから、この効果が単に解剖学的構造によ  
るものでなく機能的側面をもつことも主張されている。

著者の両眼間転移、鏡像逆転効果に関する主張を再求  
心性興奮の模型に結合して完全に実証するためにはさら  
に広範囲の条件分析と実験的研究が要請されるとはい  
え、この主張の下で行われたI部の実験的研究は、条件  
性弁別下の外的刺激布置と使用眼との機能的関連を明に  
し、現象としての鏡像逆転効果の解明にも多くの示唆を  
与えている。また、II部で行われた実験的分析は鏡像逆  
転効果の特徴を組織的に明確にし、新しい事実をも示し  
て斯方面の今後の研究に多くの寄与をなしている。

著者は本論文によって文学博士の学位を授与されるに  
値するものとみなされる。

## 博士(乙)

教育学博士

第1023号 関口富左 昭和54年3月16日

和洋女子専門学校本科(旧制)

(大正2年3月26日生)

女子教育における裁縫の教育史的研究

——江戸・明治両時代における

裁縫教育を中心として——

〔論文審査担当者〕

主査 村井 実

(慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員  
文学博士)

副査 西村 皓

(慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員)

副査 中山 一 義

(慶應義塾大学名誉教授 文学博士)

副査 石川 松太郎

(和洋女子大学文家政学部教授)

〔学力確認担当者〕

村井 実

(慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員)

西村 皓

(慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員)

## 〔論文審査の要旨〕

著者は、本論文においてまず、江戸時代から明治時代  
に及ぶ裁縫教育が、理念・教材内容・指導法等の諸側面  
で遂げた個別的・総体的発達過程について詳細な調査  
を行い、その実態の究明に力を注いでいる。次いで、か  
かる裁縫教育の発達が、女子教育史上、すなわち女子を  
してその特性を活かしつつ真の「人間」にまで成長を遂  
げしめる過程のなかで、果たしえた役割ないし意義に関  
する史的考察を試みている。それゆえ本論文は「裁縫教  
育の発達過程を踏まえた女子の人間形成に関する史的研  
究」とも称せられるべきものである。

如上の本論文にみられる研究内容および方法につい  
て、特筆に値すると思われる諸点を以下に摘記する。

第一は、豊富な記録・文書・文献類を取り上げ、その  
一つ一つに資料としての価値吟味を施した上で、系統的  
に整理・整序し、本論文のテーマとするところに役立て  
ようとしている点である。特に『裁物秘伝抄』(氏孝著、  
元禄三年刊)をはじめとする近世の数多い裁縫書、往來  
物、また『小学裁縫』(五木一著、明治七年官許)など  
三十七種に達する近代学校用の裁縫教科・書教授書を取  
り上げ、それぞれの作者の編集意図・方針、技術習得に  
必須として採録している諸教材とその組み立て等につい  
て、きめの細い調査・検討を加えているところに、この  
特徴を指摘できる。わけてもこれら諸文献に収録されて  
いる多数の裁方図に精緻な分析を施し、ここから各作者  
の教育理念や指導法上の配慮を読みとろうとする研究作  
業は、これまでの教育史研究では、絶えて行われなかつ  
た新しい試みとして注目に値する。(第一編第二・三章  
第二編第六章)

特筆の第二は、研究の対象を、江戸—東京のごとき大  
都市に限らず長野県はじめ広汎な諸地域にまで、また国  
公立の学校にとどまらず寺小屋・私塾・私設の初等・中  
等学校にまで拡大して研究成果の充実をもとめている点  
である。特に幕末から明治初年にかけての塾や女紅場等  
の私的教育施設についての研究は、従来の教育史研究に  
おいて閑却に付されがちだった分野であり、ましてここ